

・キャリアデザイン

新人の採用に当たり、「当社に入ったとして、3年先、5年先、10年先にどうなっていたいか」というキャリアデザインを必ず尋ねるようにしているという人事担当者と話したことがある。

彼は、そうした質問に対して明確に答えられないような人物は、採用しないというのだ。時流に乗った考え方もかもしれないが、それでいいのだろうかと危惧を感じざるを得なかった。

よく考えてみてほしい。まだ入社もしていない会社だ。実際に働いてみると、どんな仕事があるのかさえ具体的にはわからない。一般的な情報を得たところで、4月から働き始めている自分さえ、まったく実感は湧かないはずだ。ましてや、3年先、5年先、10年先に自分がどんな働き方をしていたいかなど、具体的にイメージしようがないのではないか。

そんなことは、真剣に考えたらとても答えられない。妄想することならできても、まじめに描くことなど無理だろう。

人事担当者、がこの質問をすることで、要求された課題に適切に対応する能力をみている、妄想でもいいから、要求に応じて適切な回答を考え、それを説得力をもって提示する論理力やプレゼンカをみているというのなら問題ない。だが、**キャリアデザインそのものに本気で注目しており、それが明確にできていない人物を切り捨てるとしたら、とんでもない勘違い**と言えないだろうか。

・明るい未来予想図が描ければモチベーションが上がり物事が好転する

私は2011年に『記憶の整理術』（PHP新書）という本を書いた。そこでは、記憶の見方の180度の転換と銘打って、記憶というのは過去の記録ではなく現在の自分による解釈である、ゆえに過去を変えるのにタイムマシンに乗る必要はないし、自分の視点が変われば過去も変わる、未来予想図は回想記憶をもとに描かれる、したがって過去についての記憶を前向きに整理することで明るい未来予想図が描けるようになる、明るい未来予想図が描ければモチベーションが上がり物事が好転する、ということを唱えた。

本の帯でも、「逆境をバネにし、飛躍に結びつける！ 明るい未来予想図が描けるようになる！」と謳っている。

この本の主張に対して、知人のコンサルタントたちが、賛同しつつも異口同音に漏らした感想というか意見が、非常に印象的だった。「未来予想図」という言い方は甘すぎる。予想図などという言い方が曖昧すぎる。そんな漠然としたものでは弱い、絶対実現してみせるといった意志が感じられない。目標に到達するために何をすればいいかがわからない。「未来設計図」と言うべきだ。簡単に言えば、そのような主旨だった。

コンサルタントの人たちは、組織をどう動かしたらよいかに迷う人たちに指針を与えることを仕事としているため、そのような発想になるのだろうなと感じた。

組織を動かすのと自分を動かすのは違う。組織の戦略策定と個人のキャリア形成を同じ次元で論じるのはおかしい。キャリアデザインというの、コンサルタント系の人たちが積極的に推奨しているが、前提が間違ってるんじゃないか。そんな違和感をもった。

・どんな仕事でも構わない。本気で向き合うことが大切

自分のキャリアデザインに基づく行動計画に対する疑問や、これでいいのかという不安だけではない。与えられた仕事に対して、

「これは将来の私のキャリアにどう役立つのですか？」

「この仕事は、私が目指しているキャリアとあまりに懸け離れているように思うのですが……」

といった疑問を口にする若手社員が増えているようだ。**今やっている仕事が、自分の将来のキャリアにどうつながるかわからない。だから本気でやる気になれない**というのだ。

目の前の仕事や課題に集中できないのは、キャリア形成にとって非常に大きな損失だ。目の前の仕事や課題に没頭することで、いろんな仕事力が鍛えられていくからだ。

本気になって自分の仕事に向き合うとき、行動力、集中力、粘る力、洞察力、段取り力、情報収集力、交渉力、ネットワーク力など、あらゆる仕事力が総動員される。そうでないと仕事を十分に遂行することはできない。そうしているうちに、仕事力は高まっていく。

どんな仕事でも構わない。本気で向き合うことが大切なのだ。それによって、どんな仕事

をするにも必要となる一般的な仕事力を高めることができる。目の前の仕事に集中できないということは、仕事力を鍛えるチャンスを失うことを意味する。

・落合博満の人生

体育会系にはびこる意味のないしごきや上下関係が我慢できない**落合博満**は、高校時代の野球部にも馴染めず、すぐに退部。だが、その実力に頼らざるを得ない野球部は落合を説得し、試合のときだけ出場させたという話は有名だ。卒業後、落合は東洋大学に進学したものの、やはり野球部の体育会系の体質に我慢できずに退学し、地元のボウリング場でアルバイトをしていた。そうしているうちにボウリングの魅力に惹かれた落合は、プロボウラーを目指すようになった。ところが、運転中のスピード違反で罰金を払ったために、プロテスト受験のために貯めていた貯金がなくなり、受験できなかった。その後、高校時代の恩師の薦めで、東芝府中工場に臨時工として就職し、それがプロ野球人生につながっていった。

・自分を知るには、行動することが必要だ。

そもそも自己分析の素材は、これまでの自分自身の行動のサンプルである。ゆえに、自己分析を有効なものにしていこうと思うなら、行動のサンプルを増やさなければならない。いくらじっくり考えても、行動しないかぎりなかなか自分は見えてこない。

仕事することで発見する自己。

何らかの役割を引き受けることで発見する自己。

人とかかわることで発見する自己。

行動することで、このようにそれまで気づかなかった自分の一面を発見する。何でもやってみて初めてわかることがある。

・行動し、経験することで、考える材料が増える

行き詰まったときは、とにかく動くことが大切だ。考えていても何も見えてこない。考えすぎて身動きがとれなくなることが多い。動けば動くだけ見えてくるものがある。動かなければ視界は開けない。

行動し、経験することで、考える材料が増え、気になること、もっと知りたいこと、試してみたいことが出てくる。気づきや経験が増えることで、将来の計画も、求めるものも、そのつど変わってくる。

・できないことができるようになるのが成長

つぎのようなイチロー選手の言葉は、まさにそうした潜在能力を引き出そうとする姿勢を指すものといえる。

「もがいても、もがいても、何を考えても、

何にトライしてもダメなときが人生にはあると思うんですけど、

そういうときこそ、

自分に重荷を課すということが、必要だと思うんです。

自分はできないかもしれないけど、

それをあえてやるぞっていうことは、

すごく大事なことだって、最近は思いますね。」(児玉光雄『この二言が人生を変えるイチロー思考』 三笠書房)

適性というものをうっかり固定的にとらえると、成長が止まってしまう。今のままの自分の能力で無理なくこなせる仕事は自分に向いた仕事だ、自分に適性がある仕事だ。そんな勘違いが横行しているように思う。それは危険な発想だ。

できないことができるようになるのが成長であり、自分が成長しているといった実感が喜びや充実を生む。それが、さらなる頑張りの原動力となり、ますますできることが増えていく。そうした好循環の中で潜在能力の開発が進み、いろいろな仕事に対する適性が身についていく。

だからこそ、チャレンジということが重要な意味をもつ。チャレンジが適性を生み出す。

そんな側面がある。

新たな仕事を任せられたとき、自分には適性があるのだろうかと考えて、不安になる人がいる。その発想が成長の妨げになる。新たな仕事をするとき、それは自分の中に新たな適性

を育てるチャンスなのだ。慣れない仕事を前にしたとき、
「自分には、この仕事に対する適性があるのだろうか」
などと自問するのではなく、
「新たな適性が開発されるチャンスかもしれない」
と前向きにとらえることが大切だ。そうした姿勢が定着することで、適性はかぎりなく開発されていく。

・すべての大学生がキャリア教育を受けることとなった

大学は生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導に取り組むことが必要だとして、そのための体制を整えることを義務づける新たな**大学設置基準**が2010年2月に公布され、2011年4月より施行された。

これにより、**すべての大学生がキャリア教育を受けることとなった**。

こうした動向を踏まえて、新たな設置基準公布の数年前からすでに、**多くの大学にはキャリアセンターといった類の部署が置かれ**、キャリア教育的なさまざまな催しや担当職員によるサポートが行われるようになった。

・「好きなこと探し」

昨今さかんになったキャリア教育では、「好きなこと探し」をさかんに促すが、とんでもなく見当違いなことをしていると言うべきだろう。

先日ちょっと立ち話をした就活2年目の学生は、うまくいっていない就活の現状を話しながら、

『好きなことを仕事にするように』って言うけど、好きなことをして暮らしていける入ってどれだけいるんですか。そんなことを言われ続けたせいで、僕は結局2年かけてもううまくいってないような気がしてきました。『好きなことを探して仕事に結びつけろ』なんて、すごく無責任な言い方だと思います。そんな言葉に踊らされてた自分が悪いんですけど」

と恨めしげに呟いた。

・自己呈示

自己呈示というのは、他者に対して特定の印象を与えるために、自己に関する情報を調整して与える行動を指す。

根気のある人物に見せるために、困難にもめげずに頑張り抜いたエピソードを語る。内省的な人物に見えるように、後悔していることや、それを踏まえてこれからはこういう風にやっていきたいと思っているというようなことを話す。有能に見せるために、あまりみんなが知らないような知識や情報を示したり、独自の見解を披露したりする。こうした行動は、どれも自己呈示の一種といえる。

就活の面接や人事評価の面接では、自分が使える人物に見られるように、だれもがさりげなく自己呈示をしているのである。

・会社というのは、理不尽に満ちた社会

また、サラリーマン生活についても、理が通らない理不尽なものだと知っておくべきだという。そして、**会社というのは、理不尽に満ちた社会**であり、生きるための免疫を強くしてくれる鍛錬の場であり、そこで鍛えられて力がついていくものだという。

・開発すべきスキル：好奇心、粘り強さ、柔軟性、楽観性、冒険心

変動の激しい社会を生き抜いて納得のいくキャリアをつくっていくために、計画された偶発性理論では、**偶然の出来事をキャリア発達の好機とみなし、それをうまく利用すること**を推奨する。さらには、偶然の好機を積極的に生み出す努力も必要であるとする。

そのために開発すべきスキルとして、**好奇心、粘り強さ、柔軟性、楽観性、冒険心の5つ**をあげている。

○好奇心 新たな学習の機会を積極的に求めること

先が見通せない変動の激しい時代には、何があとで役に立つかなどわからない。取りあ

えずいろんなことに興味をもつ好奇心の強さが、あとになって生きることが多く、偶然の好運を生み出すことにもつながる。好奇心が乏しく、幅の狭い人生を送っていると、想定外の展開に対応する際に行き詰まりやすい。

○**粘り強さ** つまづいてもすぐに諦めずに頑張り続けること

自分のキャリア上に想定外の出来事が降りかかってきたとき、だれでも大いに動揺するものだが、そこで粘り強く動くことができなければ、逆境を乗り越えることができず、潰されてしまう。

○**柔軟性** 状況に応じて態度を変えること

変動の激しい時代を生き抜くにも、想定外の展開に対応していくにも、状況に応じて考え方や行動のとり方を調整する柔軟性が必要である。従来やり方に固執するタイプは、状況の変化についていけず、行き詰まりやすい。

○**楽観性** 新たな状況でも、何とかなる、うまくいくとみなすこと

想定外の展開となったときに威力を発揮するのが、楽観的な心の構えだ。これからどうなるかわからないというとき、「どうしよう」と不安になると気持ちが萎縮し、逆境を突き抜ける行動はとりにくい。反対に、「何とかなるさ」と楽観的に構えると、伸び伸びとした気持ちになって、力強い行動につながりやすい。

○**冒険心** 結果が不確かでもリスクを恐れず、とりあえずやってみること

変動が激しく先が不透明な時代には、安定にとらわれすぎると、不安ばかりが増して、状況の変化に対応できなくなる。そんな時代に必要なのが、リスクを過度に恐れず、自分を信じて全力で未知の状況に飛び込んでいく冒険心である。その際、目の前の状況に集中し、全力を尽くすという姿勢を伴うことが不可欠だ。